くまざさ

第 14 号
発　行
釧路湖陵同窓会
発行日
昭和61年8月10日
印刷所
藤田印刷KK

母校第二十一代校長に
釧路出身の町田氏着任

柔道で鍛えぬいたがっしりとした体軀から滲み出てくる精悍さが町田先生から受ける印象である。しかし、教育についての信念を語りはじめると、内に秘めた情熱はもちろん、人間愛に満ちた限りない優しさが伝わってくるのだ。

—「過去」に感謝し「現在」を信頼し「未来」に大いなる希望を—をモットーとして生きなければならない。と力説される。そこに人間町田校長の教育者としての真実がある。

今年四月の異動で、わが母校の第二十一代校長として着任されたが、地もと釧路市出身の校長は、町田先生が初めてだそうである。人一倍「ふるさと」思いの先生は今年の元旦に、抱負として、次の詩を新聞に寄せている。

成難き　教師として　得難き
人生に生き　有難き　自分に
感謝しつつ　人を愛し、ふるさと
を愛す。　子の成長に、今日も
いそしむ。

母校発展のために、町田校長のこれからのご活躍を期待し、同窓諸賢の絶大な支えを願う。（徳）

【経　歴】

昭和28年学大釧路分校卒業、この年釧路商業高校開校にあたり奉職、41年まで13年間勤務する。後母校に42年8月まで在職、札幌オリンピック開催に関連して道教委入り。保健体育の指導主事、主査を歴任する。46年当別高校の教頭として教育現場にもどり、50年釧路市立北陽高校教頭として釧路に帰る。52年雄武高校長に昇任。55年釧路北高の初代校長として再び帰釧。学校の校風と伝統づくりの基礎を確立する。59年砂川南高校長として転出したが、今年になって三たび故郷にもどり、わが母校の第二十一代校長となる。

ご挨拶
共に進まん勇ましく

学校長　町田康雄

このたび、道東の名門校釧路湖陵の校長を拝命し、誠に光栄に存じ感激しております。

故郷の湖陵での奉職は、二度目で二十年ぶりになります。私は、先生、父母、生徒にそれぞれの場で次の様に挨拶をしました。

●先生方には、

「温故知新」の心を大切に、湖陵につとめさせていただく。

1、先生方は仲よく（学校の親として子によい後姿を）

2、生徒を大事に（学級の子供として厳しく、やさしく）

3、校舎をよりよく（今の校舎をきれいにし一日も早い改築を）

●生徒たちには、

今日から学校の親父になった町田である。〝共に進まん勇ましく〟

●父母の皆さんには、

故郷釧路での御恩返しを湖陵で一所懸命させていただきます。

同窓の皆様！

皆様のお力添えと、父母の方々の御協力をいただき、教職員が和を大事にして、いいこども達を、よりよく、大きく育ててゆきたいものと念じております。そして、〝湖陵がよりよくなると、故郷釧路がもっとよくなる〟ことを肝に銘じ、精進してまいる所存です。

皆様の一層の御支援をお願い申し上げます。

母校

学校は、こども達を育み
こども達は　学校を想う
学舎のふところに抱かれ
たくましく　豊かにそだつ

こども達は　学校を巣立ち
いつの日か　報恩(むくい)いん
嬉しい時、悲しい時
共に喜び　共に語り合おう

親は　社会の輪の中で
人を愛し　故郷を愛す
心の広い　人間(ひと)となれと
子の成長(そだち)を　いつも見守る。

学園だより

●町田康雄校長を迎える

安井友博校長の後任として、第二十一代校長町田康雄先生が着任した。かって釧路北高校開校でご苦労なさったことで有名。

「温故知新」をかかげ、伝統を尊重しながら、力をあわせていい湖陵を、生徒を大事にと意欲満々旺盛な行動力を見せている。

●職員の動き

〈転出〉

校長　安井友博　札幌北陵高校
教頭　市原　穣　風連高校（校長）
教諭　寺門　茂　帯広緑陽高校
教諭　沢本一夫　北見北斗高校
〃　富樫次雄　松前高校
〃　後藤　大　美唄東高校
〃　津藤憲英　厚真高校
事務　岸本　穣　鹿追高校

〈新任〉

校長　町田康雄　砂川南高校
教頭　谷村善通　北見北斗（定）
教諭　正木　洋　伊達高校
〃　桝田規文　浜頓別高校
〃　柴田喜枝子　津別高校
〃　屋敷健一　士別高校
事務　和気えり　新採用

61年全国高等学校総合体育大会ハンドボール北海道予選優勝
S61・6・21　於 札幌市

●部活動状況（全国大会）

「61年全国高等学校総合体育大会」

●陸上の部　400M（木山）
800M・3000M（平川）
顧問　熊谷　勉

●ハンドボール（女子）
選手17名　顧問　小島収治

「第33回NHK杯全国放送コンテスト（ラジオ番組自由部門）」
放送局　部員　5名　顧問　岡田光平、土屋　章

●進路状況

国公立大…85	就職
私立大……96	公務員…9
短大……31	民間……17
各種学校…32	

例年90％の生徒が進学を希望しているが、ここ数年の現象として目的の大学へ合格できない生徒が多くなってきている。国公立大はもちろん私大もレベルアップしている状況をふまえて、生徒の実力養成に大いに力をそそいでいる。

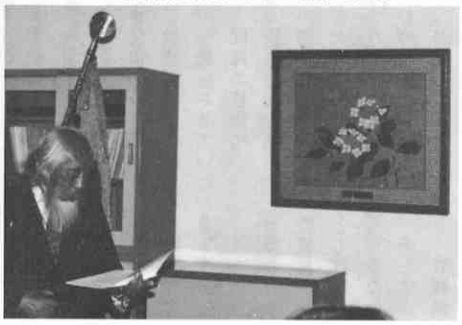
●久本画伯の絵、校長室へ

本校美術科の先生として、数多くの逸材を指導した久本画伯の絵が、一点も本校に遺されていないことはかねてから残念だとされていた。過日丹葉節郎氏のお骨折りで、阿部英一氏所蔵の「あじさい」が寄贈された。町田校長が着任早々その実現に奔走したことによる。今後同窓生諸氏の制作にかかわる美術品が集まる端緒となろう。

●「湖陵文庫」創設

図書館では、本年度から同窓生や在職教員の著作を集めることになった。先輩の業蹟を、著作を通じて在校生が身近かなものとしてほしいことを願ってである。

久本春雄画伯「あじさい」贈呈式
丹葉節郎氏のあいさつ　S61・6・3



まだとりかかったばかりの企画であるが同窓生諸氏のご理解をいただきたい。

●校内研修会のつみかさね

湖陵高校の生徒は文武両道とかねがねいわれてきたところだが、「文」をより一層たくましいものとしようと熱心な研修をつづけている。生徒の学力向上が全校的コンセンサスを得て、その成果がいずれ具体的なかたちとなるはずである。

太陽のように明るく暖かい
真心で良い品をより安く
ご奉仕するセオチェーン

営業品目
●食料品●日用品●衣料品●軽食堂

セオ

妹尾商店　釧路市新橋大通1丁目　☎25－5345
新富士ストアー　釧路市新富士駅前　☎51－3467
愛国ストアー　釧路市愛国37番地　☎36－4295
白樺ストアー　釧路市白樺台1丁目　☎91－5423
昭園ストアー　釧路市昭和190番地　☎51－8853

妹尾　継男（湖陵4期）

青春譜・湖陵ケ丘

《14》

釧中32期　奥田達也

阿寒紀行（前）

昭和五年七月二十五日　雨後曇

雨！雨！恨めしい雨に俺達の計画がすっかりおじゃんにされて汽車は十時半の二番列車。小雨の中を釧路駅に集合。一ぱいに満ちたリュックサック、重そうな天幕、かいがいしい服装にもう登山気分になってしまう。登山名簿に一行五人の名を記入して車中の人となる。年来の望みが達せられる喜びと阿寒に対する期待とを胸に抱きながら。（雄別炭鉱鉄道にて）

この街とも一週間のお別れだ。

湯波内から舌辛へ。

町らしい舌辛も過ぎて一時雄別。駅前の井戸で一同水筒へ水をつめかえる。井戸端で少時の休憩。

炊事の道具や米、味噌等を入れた三貫目位のリュックサックに登山棒を通して二人でもって長い道中をする。これが旅行のガンになった。雄別の峠をただ一度より休まない。近道近道とあせったために背丈けの半分位の密生した草を踏み分けながら幅一尺位の小道を歩かねばならない。

道で会う人毎に道を聞いた。

「もうすぐです」

徹別川を渡る。農家一つ見られない。雨は猛烈となってくる。

「絶望！絶望」と叫ぶ。

だが、一農家を発見した時の喜び。遂に一同はその農家に躍り込む。人の好さそうな老人と若者達。温かい素朴な村人の情にしばしの間苦しみを忘れる。

先輩がこの地方で評判よく活躍しているのを聞いて心強く感じた。

五時半、雨の中の行軍。暮色があたりを包んできた頃、見えた。第二発電所の電灯の光りが。

夕飯を作るも発電の機械の音響のひびきに味わうどころではない。

二日目　曇時々晴

道は今日は自動車道路。小砂利の多い道を通り過ぎた。間もなく湖畔行きの貨物自動車に出会った。交渉するも塵を一杯浴びせ去る。

ああその時の怨めしかったこと。

建てて間もない第三発電所を通り過ぎルペシペに入った。

ピリカネップを一時に出発、白水川の登山口を横に見て大きな橋を渡る。白樺林の中、阿寒川がずうっと崖の下を瀬の音も高らかに流れている。轍の跡が深く、石ころだらけの道は歩きにくい。

カーブを曲がった時、雄阿寒岳が雲を漂わせて青空にくっきりと浮び出た。

二十分歩いては十分以上も休むを繰り返しながら歩く。雨に降られ、下り道なのに荷が重く、

「疲れた、疲れた」の連発。

雄阿寒岳は行く手にずうっと迎え待っている。雌阿寒岳は山陰になって見えない。水筒は空になったけれど湖畔まで水のあるところはない。足は金棒、頭は脈打つ音が聞こえる。

「何故我々は金をかけて苦しまねばならぬ？」と考えながらロボットのように歩く。

ようやく湖が見えた。山に囲まれた紺青の湖。マリモの湖が目に飛び込んできたのに、それを観賞する心の余裕もない。ただ、ようやく着いた、という意識だけ。

黙って座り、夕陽を眺める。

向かい側の山浦旅館に女学生二三人が出入りしていた。二十余戸ばかりの村は大部分が旅館と食料品店である。その村人がセンセイションを巻き起こした釧中生五人を見にくる。真黒な五人の顔に驚いたのである。

ボート店の人に聞いて、ポッケへ行く。途中で北見からきた大勢の小学生にあった。

岸辺に嵯峨と金安が天幕を張り、米内が炉を掘り、高橋と石岡が米磨ぎに出かけた。

陽は山陰に沈み、西空はホウズキ色。ひたひたと寄せる波の音。

疲れと飢えで、五人はじっと飯翁のかかっている火を見つめる。

缶詰をおかずに腹一杯に食べた。薬泉を一浴びさせてもらい、上衣だけを脱いでかたまって寝る。

はじめの漫談も、疲れに一人眠り、二人眠りして、いつしか皆眠ってしまう。

先輩の評判に笑み
なぜ苦しまねばならぬ？

御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

政府登録国際観光ホテル・日本ホテル協会会員

釧路パシフィックホテル

れんが屋★AM11:00～PM11:00

トロイカ★AM 8:00～PM11:00

パシフィックイン・八まき・八宝園

中村　隆（釧中27期）

釧路市栄町2丁目6番地　☎24-8811

わが青春は…

青春、そして今。

釧中二十六期　野口　一

私達二十六期生は、昭和十三年四月に入学した。日中戦争たけなわの頃であったが、戦禍は遠く、国内には豊かとは言えないがそれなりの生活があった。

同級生に藤田重喜君がいた。当時末広町九丁目にあった印刷所の三男坊で、優しい心根の剽軽な性格からすぐ級の人気者になった。

やがて、私達は四年生の初冬太平洋戦争勃発の日を迎えたが、前途に不安はなかった。そして昭和十八年三月卒業の日迄は、時に援農作業に動員されたり、旭川の兵営宿泊を体験させられたりしたが、苛烈な戦局の中にあって、曲りなりにも五ケ年間の釧中生活を送る事が出来た。そう言えば青春の日の誰もがそうであるように、私達も自分の開かれた人生を信じ、浩然と胸を張って校門を後にした。

ところで、農科大学志望であった藤田君は、卒業記念に「大地に挑む」と墨書した自分の写真を贈ってくれたが、程なく陸軍特別飛行学生に志願した。そして、終戦の二日前昭和二十年八月十三日、陸軍特別攻撃隊神鷲隊の一員として薄暮の鹿島灘銚子沖において米空母群に突入し、一九才の若い生涯を閉じた。

さて、私達は昭和五八年九月爽秋の一日卒業四〇周年ということで鬼籍に入った二〇名の旧友の慰霊祭を兼ねて同期会をやろうということになり、本行寺に参り、ついで八ツ浪で懇親会に入った。青春の追憶は直截且つ饒舌であり時間を超えて感傷的でもある。集った四〇名近くの旧友諸君には、釧中時代の事共は渺茫たる彼方の事ではなくつい昨日であり、その想い出の中に藤田君がいた。そして同君のみならず、戦争とのかかわりの中で夫々の人生の方向が決定されていった事を改めて思い知らされたのである。青春は常に輝かしく然し戦争に栄光は許されまい。私達の青春の或る日はそのようなものであったが、その体験者である私達は後輩に「語り部」としての役目を果していたのだろうか。

応援歌に我が青春を思ふ

湖陵七期　原　轟　戸

〝阿寒のお山の浅緑〟と市民球場に流れる我が湖陵の応援歌に、三十余年振り、卒業後初めて野球の応援に出かけた私の胸の中を熱い血潮が学生時代と変りなく流れるのを感じ、後輩の声援を我が青春時代の姿と二重写しに見る思いでした。

憧れの湖陵の入学式に泥んこ道で迎えてくれた校門前、玄関に入ると何んとなく、うす暗く期待と不安の入り混った不思議な緊張感を覚えた事を今も忘れられない。

球場で応援歌や応援のエールを聞きながら、私の三年間も野球の応援に情熱を燃やした事が青春であったのかもしれないと感激に浸っておりました。

野球大会の度に最前列に陣取って我がクラス女子の黄色い声援が選手の一投一打に！時には応援団長顔負けの声量での応援が、三年間一度も江南高に負けなかった事をもって我が応援の成果と自負し又毎年文化祭の写真展の応援風景の写真に必ず写っている事が話題ともなり又同期会の度に思い出話しにもなっております。

一年生の三学期に校舎焼失に見舞われ、二年生の一年間は東中に間借り授業、焼け残った湖陵の校舎を横目に見ながら東中までの道の遠く感じた事、でもお陰でのんびり春採湖を見下す丘で昼寝も出来ました。三年生になってやっと焼残った体育館を仕切った教室にもどり落ち着きをとり戻した頃「卒業するまでには、新しい教室で学ばせてやりたい」と校長先生始め先生方の努力と熱意のお陰で二学期後半より木の香も高い新築校舎で学び卒業させて頂きました。七期生は三年間いろ〳〵と他期生の体験しなかった事を体験した故か、同期のきずなが固く同期会もここ十数年毎年八月第二土曜日に各クラス持ち廻り幹事で行われ、札幌同期会十月第二土曜日、東京十一月第二土曜日と決っており、年三回集まる機会を作っています。青春を語り明す喜びを味わい、最後には必ず、校歌・応援歌をうたって。

真心伝えたい…御婚礼・御宴会・御会合・御宿泊

釧路シーサイドホテル

黒滝恵一（湖陵14期）

〒085 釧路市南大通り5丁目1－1

ご予約・お問い合せは（0154）41－1717

当番期紹介

釧中、そして湖陵

釧中三十五期・湖陵四期
熊谷　修

湖陵高校同窓会総会が、従来キャバレーニュー東宝で開催されていたのを現在の商工会館で開催するようになったのは、十年前の我々の当番期の時からである。我々は、同窓生皆さんが大勢参加してもらえるように、そして大先輩もその年に卒業したホヤホヤの同窓生も席を並べて交流できるようにと考えて、ワンフロアーの会場としたわけである。それ以来、各当番期の方々の努力によって参加人員も増え、大変楽しい総会になっている。始めてワンフロアーの総会を企画してから十年、我々もそろそろ「大」のつく先輩の仲間入りする年頃にさしかかってきたような気がしている昨今である。

我々は、終戦後釧中第三十五回生として入学したのだが、教育改革によって釧中生としてはわずか一年だけで、あとは校名変更や、六・三・三制によって男女共学を経験して、同じ校舎に六年間通って思い出を文字通りあの校舎に刻みつけて、卒業したわけである。

戦後の混乱の中で過した湖陵が丘の日々は、我々の青春の灯（あかし）となって五十路を越えた現在でもあざやかに心の中に残っている。だが我々は、釧中最後の入学ではあるが湖陵四期であり、その中には望むと望まざるとにかかわらず男子ばかりの学校に転校せざるを得なかった女子生徒がいた。そして彼女等は、男子生徒ばかりの学園生活を華やいだものにしてくれたことを、感謝をこめて付記しておきたい。

各世代交流の機会

湖陵十四期
鶴田穏雄

最近、とみに巷間をにぎわせている言葉に「新人類」というのがある。奇異な感じを受けないわけでもないが、現代の若者を表した造語らしい。つまり、どの分野にもある程度の好奇心を示し、周囲にも多くの影響をまきおこすが、自己のアイデンティティは維持している、（『新人類の誕生』吉成真由美著）世代ということの様である。子供は大人の心をうつす鏡といわれるだけに、生まれ育った時代の環境が強く若者達に投影されている証ともいえる。

ひるがえって、小生達の青春期はどうだったろうか。日米安保条約改定の調印、所得倍増計画策定そして党首刺殺等かなり世相は騒然としていたが、一方では高度成長に乗りマイカー、テレビの時代に入っていた。そして、不惑の年令をむかえたが、どんな代名詞がついたのか。同窓会はいわばこうした世相を滲ませた各世代が一堂に介し、侃侃諤諤と交流する格好の機会といえる。

それにつけても、小生達にとって同窓会は、いままでは遠い存在であった。それだけに、中間幹事役としては困惑からのスタートであり、湖陵四期の諸先輩と二十四期の後輩の心意気に励まされ通しの日々であった。

釧中湖陵の校章つきテレホンカードで全国津々浦々まで声の便りが届かれんことを。

「普通」の我々

湖陵二十四期
松尾一史

我々24期生が湖陵高校へ入学したのは一九六九年。あたかも70年安保騒乱の前年。1月には東大安田講堂で全学連と機動隊が一大衝突し、3月には日航よど号ハイジャック事件が起った。それらをヤジウマ根性で眺めていた我々も入学後学園紛争まがいの事件が湖陵にも起きてる事を知った。ちなみに制帽が自由化されたのはこの年である。だが決してそれら事件の当時者ではなく、その時代を知る最後の目撃者に過ぎない。

その後にブームとなったのが「同棲時代」。若者は全て同棲し、或いは同棲したがっているかの様なはやり方。だがこの主体も騒乱勢力より少し年下、我々よりはやや年上の世代だったらしい。我々の卒業前後には世間で注目される様な事柄は何もなかった。我々には「紛争世代」、「同棲時代」、近頃なら「クリスタル族」や「新人類」等表現される言葉がない。

我々とは一体何か？怒りのパワーの先輩と個人的な事柄に関心の移った後輩達の間にあって、そうだ我らこそが全き「普通」に違いないと思い到る。今回当番期の我々もこの普通の力を尽して会券販売や寄附も何とかお許し戴ける水準か。最年少幹事の仕事も4期14期の先輩の御助力により曲りなりに果して微力でも同窓会一層の発展に寄与したいと念願している。

御卒業・御入学の
晴れの日を
歴史の1ページに…

釧路市幣舞町2番2号
株式会社 吉井写真館
代表取締役　吉井祥朔（湖陵18期）
電話　41－4798番

生きている校訓 誠愛勇

在京釧中会

「在京釧中会」については、釧路在住の磯部正己氏（釧中七期）が、会誌の編集者である同期の永井保氏から会誌を入手し、事務局に届けられて、その活動を知ることができた。会誌を開いて、まず初めにおどろいたのが、釧中の一回生、二回生といった大々先輩の名前が連なっていることである。会誌はそれぞれの先輩が、原稿用紙に書き記した文章をそのままコピーして綴じ込んだものである。題して「在京釧中会誌・回想と躍進」である。表紙の右下に、ローマ字で釧路と記され、丹頂鶴のスケッチが中央に位置している。

文章の一編一編は誠に端正ですばらしいものである。明治の気骨が感じられ強く引きつけられた。部分的に紹介するのは勿体ないし、先輩に申訳ないので、別な機会になんとかして同窓諸兄に読んでもらうことにする。

在京釧中会 六一・五・二七 目黒雅敍園

「在京釧中会」は、昭和四十六年五月に恩師の故宇野茂太先生を迎えして、有志によって結成され、毎年会合を開いて親睦を深めている。これまでに、会誌をつくり、同好の有志が俳句の会をもつなど、地味ではあるが文化を学びつくる機会をもっている。昨年、総会で会則制定をみて、本格的な組織づくりがなされた。

（）は卒業期

会　長　佐々木一雄（一）
副会長　幡磨嘉蔵（二）
幹　事　成田勝太郎（四）
〃　永井　保（七）
〃　加藤　晃（七）
会計監査　原　清剛（二）
〃　小坂　孟（四）

会報メモを読むと、先輩の消息がいろ〳〵とわかるが、例えば、伊藤郷一氏（釧中三期）が昨夏北海道旅行中、ふるさと釧路の地で病に倒れて、現在横浜市の友愛病院で療養中であること。そしてその伊藤氏が自著「嵐ケ丘の青春」を出版され、その中の第六章で「嵐ケ丘のわが青春―釧中校風刷新会事件覚え書―」があり、母校の創立期の歴史が記されているそうである。

同好の俳句の会の作品が、会誌に載せられている。在京釧中会同人俳句として、はるか故郷をなつかしんでつくられたものを見出すことができる。

その昔茅野花園の花見かな
親しさや友の土産の蕗の薹
海鳴りの夜明流氷港埋め

在京釧中会の先輩諸兄が、ますます壮健で活躍され、会が発展することを念じたい。（豊）

●座っている右側から（）卒業期
原　清剛（二）
竹ケ原輔之矢（十）
佐々木一雄（一）
加藤　晃（七）
尾崎定雄（二）
小坂　孟（四）
幡磨嘉蔵（二）

●立っている右側から
永井　保（七）
須藤秀男（十）
佐藤吉栄（十）
中村由夫（十）
竹林信夫（十）
成田勝太郎（四）

（敬称略）

御卒業・御入学の喜こびを１枚の写真に……
湖陵・江南・北陽・星園・短大高校他
市内小中学校卒業アルバム専属作成
株式会社 工藤写真館
工藤寿男（釧中26期）
釧路市南大通５―３―７　TEL ４１－５７５１
駐車場（20台収容）完備

釧中魂 脈々と……

釧中二〇会

釧中第二十期（昭和十二年三月卒業）昭和五十二年の同窓会員名簿によれば、卒業生百十三名であるが、現在の会員は「釧路二〇会」全員で三十一名だそうである。会長は、佛心寺の山辺芳雄氏、事務局長は姥澤均氏。今年は春季総会を二月二十日に開催。写真の各会員が出席した。当日の出席者は…

青山義雄　石山幸男　姥澤　均
岡島完一　沖　公夫　杉山泰夫
手林俊夫　寺本美久　生田目実
沼崎吉麒　早坂孝史　林田久男
山辺芳雄　加藤幸一　（敬称略）

会報第二十二号に、総会の様子が記載されているので、そのまゝ掲載すると――

「寒波の残る春季総会は開催時期時間を含めて幹事も頭を痛める。然し、都合をつけて、元気な会員が参加してくれた。林田カメラマンが最近入手したミノルタで記念写真撮影――前回失敗、大丈夫かとヤジが入る――只今林田君よりとどけられた素晴しい写真を前にしてとても楽しい気分でいます。近着の文春〝同級生交歓〟一文、――それにしても写真によれば頭髪の違いは不公平であるが、やはり禿は体質なのだろうか――とある。全く同感、実に素晴しい風格の二〇会員である。」

文中の林田久男氏には、「くまざさ」第十五号で、シリーズ「わが青春は…」に寄稿していただいているが、戦中時代に多くの友を失うという悲しい経験を経ているだけに、――人を愛し「魚似魚行水自清」、健康第一に意義ある日々を送りたい。――という結びに打たれる。釧路二〇会が山辺会長の説かれる「一期一会」の心を大切に結束を強めていることが、よく理解できる。

昭和六十二年には、卒業五十周年を記念して、盛大に全国大会を開催しようと、準備が着々と進められている。この八月の夏季総会で具体的な取り組みが決定されることになっているそうである。

ここに、昭和三十四年七月に発行された「湖陵同窓会報」の創刊号（コピー）がある。大変貴重な資料で、当時の中川久平会長の挨拶文の中に、母校という言葉にはラテン語で育ての母親という意味があり「同窓会とは同じ母親から育てられた子どもということになり、子どもの心に還るということが、同窓生として一番大切なことである。この童心の把持が湖陵の伝統なのだ」と述べている。――

童心にもどって、同窓の絆を強めていくことそのものに意義があるとつくづく思う。釧中二十期の集いが、五十周年記念の行事を通して、ます〳〵強固になり、発展されるように望んで止まない。（上）

釧路20会 春季総会に集う会員

道／東／の／印／刷／セ／ン／タ／ー

藤田印刷株式会社

〒085 釧路市若草町３番地１　☎22-4165・23-7411

社会人一年生

「もう一人の私」

釧路市役所
近久　由美子（湖36期）

気がついたら、もう一人の自分がいました。というのが、新社会人としての素直な感想です。

全くの未知の世界へ飛び込んで、一度に押し寄せてくる見慣れぬもの、聞き慣れぬ言葉にただ戸惑うばかりの毎日。自分が何をしたらよいのかもわからず、最初の頃は、新しい世界で自分だけが異邦人のような気がして、不安でいっぱいでした。

ダメでもともとという気持ちで受けた採用試験に運よく合格できて、総務部の職員課人事係に配属されました。人事、服務関係等、いわば職員の方々の世話役的な仕事が主なものです。そのため、市民よりも、職員の方々と接する機会が多く、また違った面で気を使います。電話の応対なども、だいぶん慣れたものの、今でも時々戸惑うことがありますが、そんな時は職場の先輩方がフォローして下さいます。仕事でわからないこともたいへん丁寧に指導して下さり本当に感謝しています。

今の仕事につくまで、まさか私が経理に携わるとは、就職に苦労していた自分が臨時職員の方々のお世話をするようになるとは思ってもみませんでした。そういった意味で、今まで気付かなかったもう一人の自分に出会ったような、そんな気がするのです。

言葉にしなくてもわかり合える同世代だけの世界から、様々な時代を生きてこられた社会の先輩達の中へ仲間入りした私たち。まだまだ若い小さな芽でしかありませんけれど、新しい世界で先輩方から多くのものを吸収し、まっすぐに、スクスクと伸びていきたい—そう願っています。

「現在、社会人ing」

釧路税務署
遠藤　弘恵（湖37期）

住みなれた故郷や家族と離れ、一年三ケ月という税務大学校での研修を終えて、一ケ月前私は釧路税務署に赴任しました。実際に働くようになってからはまだ日が浅いので、社会人という意識が自分の中に芽生え始めたのも、本当に最近のことです。

税務大学校の研修は、税務職員としての専門知識をはじめ、多様な教養知識を修得する期間です。私の場合、その全てが身になったかどうかは疑問ですが、とりあえず頭に詰め込んだ分は、その許容量をはるかに超えていたのではないかと思います。とにかく必死でした。研修を受けながら、給料をいただいていたわけですから、真剣に講義を受けることイコール国民の奉仕者として働くことだと思っていたのです。

税大の卒業が、私の社会人としての本当のスタートでした。それまで机上で研修したことを、今度は税務署で実践するのです。税務職は、国の財政にかかわる重要な仕事ですから、多少のミスでも大事に至ることがあります。とかくミスを犯しやすい新人にとっては毎日が緊張と不安の連続です。つい先日から、私は納税窓口を担当することになりました。納税者と応対する時は、新人ということは通用しません。税務署の顔になるという自覚を持つことが、仕事に対する自信にもつながると思います。

最近、男女平等雇用についての話をよく耳にします。男性と同じ研修を受けてきた以上、私にとっても、「女性だから」という甘えは許されません。これから働く女性として、自分で選んだ税務の道を究めていきたいと思います。

あとがき

▼夏の到来の遅い釧路だが、今夏は特別寒い日々が続いて意気が上がらなかったが、会報づくりの後半で急に陽差しが強まった。高校野球の北大会は、地もと開催で、初めから熱気があり、昨年に引き続いて出場の母校野球部の活躍に期待がかけられた。緒戦を宿敵旭川竜谷に見事逆転勝ちして大いに意気が上がった。残念乍ら、今年も甲子園への道は閉ざされたが、われら同窓の血湧き肉踊り、青春への懐古を強く抱かせてくれた。

▼会報づくりの準備段階で、事務局から資料をいただいた。ひとつは、中で紹介した「在京釧中会」の会誌。それから「湖陵同窓会報創刊号」である。この創刊号は昭和三十四年七月に発行されているが、今日まで手にしたことがないまぼろしの会報である。次号からこれらの貴重な資料を掲載していきたいと考えている。（豊）

編集にたずさまった人
上岡　信明　遠藤　隆吉
徳田　広　豊島　弘道